

セロ弾きのゴーシュ

宮沢賢治

ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾く係りでした。けれどもあんまり上手でないという評判でした。上手でないどころではなく実は仲間の楽手のなかではいちばん下手でしたから、いつでも楽長にいじめられるのです。ひるすぎみんなは楽屋に円くならんで今度の町の音楽会へ出す第六交響曲「第六交響曲」の練習をしていました。トランペットは一生けん命歌っています。

ヴァイオリンも二いろいろ風のように鳴っています。

クラリネットもボーボーとそれに手伝っています。

ゴーシュも口をりんと結んで眼めを皿さじのようにして楽譜がくふを見つめながらもう一心に弾いています。

にわかにはたつと楽長が両手を鳴らしました。みんなびたりと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりました。

「セロがおくれた。トオテテ テテテイ、ここからやり直し。はいっ。」

みんなは今の所の少し前の所からやり直しました。ゴーシュは顔をまっ赤にして額あせに汗を出しながらやっといま云いわれたところを通りました。ほっと安心しながら、つづけて弾いていますと楽長がまた手をぱつと拍うちました。

「セロっ。糸が合わない。困るなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだがなあ。」

みんなは気の毒そうにしてわざとじぶんの譜こをのぞき込んだりじぶんの楽器をはじいて見たりしています。ゴーシュはあ

わてて糸を直しました。これはじつはゴーシュも悪いのですがセロもずいぶん悪いのです。

「今の前の小節から。はいっ。」

みんなはまたはじめました。ゴーシュも口をまげて一生けん命です。そしてこんどはかなり進みました。いいあんばいだと思っていると楽長がおどすような形をしてまたぱたと手を拍ちました。またかとゴーシュはどきっとしましたがありがたいことにはこんどは別の人でした。ゴーシュはそこでさっきじぶんのときみんながしたようにわざとじぶんの譜へ眼を近づけて何か考えるふりをしていました。

「ではすぐ今の次。はいっ。」

そらと思つて弾き出したかと思うといきなり楽長が足をどんと踏んでとなり出しました。

「だめだ。まるでなっていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことで。諸君。演奏までもうあと十日しかないんだよ。音楽を専門にやっているばかりがああ金沓鍛冶だの砂糖屋の丁稚なんかの寄り集りに負けてしまつたらいったいわれわれの面目はどうなるんだ。おいゴーシュ君。君には困るんだがなあ。表情ということがまるでできてない。怒るも喜ぶも感情というものがさっぱり出ないんだ。それにどうしてもぴたと外の楽器と合わないもなあ。いつでもきみだけとけた靴のひもを引きずつてみんなのあとをついてあるくようなんだ、困るよ、しっかりしてくれないとねえ。光輝あるわが金星音楽団がきみ一人のために悪評をとるようなことでは、みんなへもまったく気の毒だからな。では今日は練習はここまで、休んで六時にはかっきりボックスへ入ってくれ給え。」

みんなはおじぎをして、それからたばこをくわえてマツチをすつたりどこかへ出て行ったりしました。ゴーシュはその粗末な箱みたいなセロをかがえて壁の方へ向いて口をまげてぼろぼろ涙をこぼしましたが、気をとり直してじぶんだけだったひとりいまやったところをはじめからしずかにもいちど弾きはじめました。

その晩遅く、ゴーシュは何か巨きな黒いものをしよってじぶんの家へ帰ってきました。家といつてもそれは町はずれの川ばたにあるこわれた水車小屋で、ゴーシュはそこにたった一人ですんでいて午前は小屋のまわりの小さな畑でトマトの枝をきったり甘藍の虫をひろったりしてひるすきになるといつも出て行っていたのです。ゴーシュがうちへ入ってあかりをつけ

るとさつきの黒い包みをあげました。それは何でもない。あの夕方のごつごつしたセロでした。ゴーシュはそれを床の上にそつと置くと、いきなり棚からコップをとつてバケツの水をごくごくのみました。

それから頭を一つふつて椅子へかけるとまるで虎みたいな勢でひるの譜を弾きはじめました。譜をめくりながら弾いては考え考えては弾き一生けん命しまいまで行くとかたはじめからなんべんもなんべんもこうこう弾きつづけました。夜中もとうにすぎてしまいはもうじぶんが弾いているのかもわからないようになって顔もまっ赤になり眼もまるで血走つてとても物凄い顔つきになりました。いまにも倒れるかと思うように見えました。

そのとき誰たれかうしろの扉とをとんと叩たたくものがありました。

「ホーシユ君か。」ゴーシユはねぼけたように叫びました。ところがすうと扉を押してはいって来たのはいままで五六ぺん見たことのある大きな三毛猫でした。

ゴーシュの畑からとった半分熟したトマトをさも重そうに持って来てゴーシュの前におろして云いました。

「ああくたびれた。なかなか運搬^{うんぱん}はひどいやな。」

「何だと」ゴーシュがききました。

「これおみやです。たべてください。」三毛猫が云いました。

ゴーシュはひるからのむしゃくしゃをぺんにどなりつけました。

「誰がきさまにトマトなど持ってこいと云った。第一おれがきさまらのもってきたものなど食うか。それからそのトマトだっておれの畑のやつだ。何だ。赤くもならないやつをむしって。いままでもトマトの茎くきをかじったりけちらしたりしたのはおまえだろう。行ってしまえ。ねこめ。」

すると猫は肩をまるくして眼をすぼめてはいましたが口のあたりでにやにやわらって云いました。

「先生、そうお怒りになっちゃ、おからだにさわります。それよりシューマンのトロメライをひいてごらん下さい。きいてあげますから。」

「生意気なことを云うな。ねこのくせに。」

セロ弾きはしゃくにさわってこのねこのやつどうしてくれようと思はらく考えました。

「いや、遠慮えんよはありません。どうぞ。わたしはどうも先生の音楽をきかないとねむられないんです。」

「生意気だ。生意気だ。生意気だ。」

「ゴーシュはすっかり真っ赤になってひるま樂長のしたように足ぶみしてどなりましたがにわかに変えて云いました。
「では弾くよ。」

「ゴーシュは何と思ったか扉にかぎをかつて窓もみんなしめてしまい、それからセロをとりだしてあかしを消しました。すると外から二十日過ぎの月のひかりが室のなかへ半分ほどはいってきました。

「何をひけと。」

「トロメライ、ロマチックシューマン作曲。」猫は口を拭いて済まして云いました。

「そうか。トロメライというのはこういうのか。」

セロ弾きは何と思ったかまずはんけちを引きさいてじぶんの耳の穴へぎっしりつめました。それからまるで嵐あらしのような勢いきおいで「印度の虎狩インドのトラハンティング」という譜を弾きはじめました。

すると猫はしばらく首をまげて聞いていましたがいきなりパチパチパチと眼をしたかと思つと扉の方へ飛びのきました。そしていきなりどんと扉へからだをぶつつけましたが扉はあきませんでした。猫はさあこれはもう一生一代の失敗をしたという風にあわてだして眼や額からばちばち火花を出しました。するとこんどは口のひげからも鼻からも出ましたから猫はくすぐたがってしばらくしゃみをするような顔をしてそれからまたさあこうしてはいられないぞというようにはせあるきだしました。ゴーシュはすっかり面白おもしろくなってますます勢よくやり出しました。

「先生もうたくさんです。たくさんですよ。一生ですからやめてください。これからもう先生のタクトなんかとりませんから。」

「だまれ。これから虎をつかまえる所だ。」

猫はくるしがってはねあがってまわったり壁にからだをくつつけたりしましたが壁についたあとはしばらく青くひかるの

でした。しまいは猫はまるで風車のようにぐるぐるぐるぐるゴーシュをまわりました。

「ゴーシュもすこしぐるぐるして来ましたので、

「さあこれで許してやるぞ」と云いながらようやくやめました。

すると猫もけろりとして

「先生、こんやの演奏はどうかしてますね。」と云いました。

セロ弾きはまたぐつとしゃくにさわりましたが何気ない風で巻たばこを一本だして口にくわえそれからマツチを一本とって

「どうだい。工合をわるくしないかい。舌を出してごらん。」

猫はばかにしたように尖った長い舌をペロリと出しました。

「ははあ、少し荒れたね。」セロ弾きは云いながらいきなりマツチを舌でシュツとすってじぶんのたばこへつけました。さあ猫は愕いたの何の舌を風車のようにふりまわしながら入り口の扉へ行つて頭でどんとぶつつかつてはよろよろとしてまた戻つて来てどんとぶつつかつてはよろよろまた戻つて来てまたぶつつかつてはよろよろにげみちをこさえようとなりました。

「ゴーシュはしばらく面白そうに見ていましたが
「出してやるよ。もう来るなよ。ばか。」

セロ弾きは扉をあけて猫が風のように萱のなかを走って行くのを見てちよつとわらいました。それから、やっとせいせいしたというようにぐつすりねむりました。

次の晩もゴーシュがまた黒いセロの包みをかついで帰ってきました。そして水をごくごくのむとそっくりゆうべのとおりぐんぐんセロを弾きはじめました。十二時は間もなく過ぎ一時もすぎ二時もすぎてもゴーシュはまだやめませんでした。それからもう何時だかもわからず弾いているかもわからず「こつこつやっていますと誰か屋根裏をこつこつと叩くものがあります。」

「猫、まだこないのか。」

「ゴーシュが叫びますといきなり天井の穴からぼろんと音がして一疋の灰いろの鳥が降りて来ました。床へとまったのを見るとそれはかつこうでした。」

「鳥まで来るなんて。何の用だ。」ゴーシュが云いました。

「音楽を教わりたいのです。」

かつこう鳥はすまして云いました。

ゴーシュは笑って

「音楽だと。おまえの歌は、かつこう、かつこうというだけじゃあないか。」
するとかつこうが大へんまじめに

「ええ、それなんです。けれどもむずかしいですからねえ。」と云いました。

「むずかしいもんか。おまえたちのはたくさん啼くのがひどいだけで、なきようは何でもないじゃないか。」

「ところがそれがひどいんです。たとえばかつこうとこうなくのとかつこうとこうなくのとは聞いていてもよほどちがうでしょう。」

「ちがわないね。」

「ではあなたにはわからないんです。わたしらのなかまならかつこうと一万云えば一万みんなちがうんです。」

「勝手だよ。そんなにわかってるなら何もおれの処へ来なくてもいいではないか。」

「ところが私はドレミファを正確にやりたいんです。」

「ドレミファもくそもあるか。」

「ええ、外国へ行く前にぜひ一度いるんです。」

「外国もくそもあるか。」

「先生どうかドレミファを教えてください。わたしはついでうたいますから。」

「うるさいなあ。そら三べんだけ弾いてやるからすんだらさっさと帰るんだぞ。」

「コーシュはセロを取り上げてボロンボロンと糸を合わせてドレミファソラシドとひきました。するとかっこうはあわてて羽をばたばたしました。」

「ちがいます、ちがいます。そんなでないんです。」

「うるさいなあ。ではおまえやってごらん。」

「こうですよ。」かっこうはからだをまえに曲げてしばらく構えてから

「かっこう」と一つなきました。

「何だい。それがドレミファかい。おまえたちには、それではドレミファも第六交響楽「シベリウスの第六交響楽」も同じなんだな。」

「それはちがいます。」

「どうちがうんだ。」

「むずかしいのはこれをたくさん続けたのがあるんです。」

「つまりこうだろう。」セロ弾きはまたセロをとって、かっこうかっこうかっこうかっこうかっこうとつづけてひきました。

するとかっこうはたいへんよろこんで途中（途中で）からかっこうかっこうかっこうかっこうについて叫（さけ）びました。それももう一生

けん命からだをまげていつまでも叫ぶのです。

「コーシュはどうとう手が痛くなつて

「こら、いいかげんにしないか。」と云いながらやめました。するとかっこうは残念そうに眼（め）をつりあげてまだしばらく不

いていましたがやっと

「……かっこうかっこうかっこうかっこうかっこうと云ってやめました。」

「コーシュがすっかりおこってしまって、

「こらとり、もう用が済んだらかえれ」と云いました。

「どうかもういっぺん弾いてください。あなたのはいいようだけれどもすこしちがうんです。」

「何だと、おれがきさまに教わってるんではないんだぞ。帰らんか。」

「どうかたったもう一ぺんおねがいです。どうか。」かっこうは頭を何べんもこんこん下げました。「ではこれっきりだよ。」

ゴーシュは弓をかまえました。かっこうは「くっ」とひとつ息をして

「ではなるべく永くおねがいたします。」といってまた一つおじぎをしました。

「いやになっちまうなあ。」ゴーシュはにが笑いしながら弾きはじめました。するとかっこうはまたまるで本気になって「かっこうかっこうかっこう」とからだをまげてじつに一生けん命叫びました。ゴーシュははじめはむしゃくしゃしていましたがいっつもでもつづけて弾いているうちにふつと何だかこれは鳥の方がほんとうのドレミファにはまっているかなという気がしてきました。どうも弾けば弾くほどかっこうの方がいいような気がするのです。

「えいこんなばかなことしていたらおれは鳥になってしまうんじゃないか。」とゴーシュはいきなりぴたりとセ口をやめました。

するとかっこうはどしんと頭を叩かれたようにふらふらとしてそれからまたさっきのように

「かっこうかっこうかっこうかっくかっくかっく」と云ってやめました。それから恨めしそくにゴーシュを見て

「なぜやめたんですか。ぼくらならどんな意気地ないやつでものどから血が出るまでは叫ぶんですよ。」と云いました。

「何を生意気な。こんなばかなまねをいつまでしてられるか。もう出て行け。見る。夜があけるんじゃないか。」ゴーシュは窓を指さしました。

東のそらがぼうつと銀いろになってそこをまっ黒な雲が北の方へどんどん走っています。

「ではお日さまの出るまでどうぞ。もう一ぺん。ちょっとですから。」

かっこうはまた頭を下げました。

「黙れ^{だま}。いい気になって。このばか鳥め。出て行かんとむしって朝飯に食ってしまうぞ。」ゴーシュはどんと床をふみました。

するとかっこうはにわかにびっくりしたようにいきなり窓をめがけて飛び立ちました。そして硝子^{ガラス}にはげしく頭をぶつ

けてばたつと下へ落ちました。

「何だ、硝子へばかだなあ。」ゴーシュはあわてて立って窓をあげようとしたが元来この窓はそんなにいつでもするする開く窓ではありませんでした。ゴーシュが窓のわくをしきりにがたがたしているうちにまたかつこうがぱつとぶつつかつて下へ落ちました。見ると嘴のつけねからすこし血が出ています。

「いまあけてやるから待っているら。」ゴーシュがやつと二寸ばかり窓をあげたとき、かつこうは起きあがって何が何でもこんどこそというようにじつと窓の向うの東のそらを見つめて、あらん限りの力をこめた風でぱつと飛びたちました。もちろんこんどは前よりひどく硝子につきあたってかつこうは下へ落ちたまましばらく身動きもしませんでした。つかまえてドアから飛ばしてやろうとゴーシュが手を出しましたらいきなりかつこうは眼をひらいて飛びのきました。そしてまたガラスへ飛びつきそうにするのです。ゴーシュは思わず足を上げて窓をぱつとけりました。ガラスは二三枚物すこい音して碎け窓はわくのまま外へ落ちました。そのがらんとした窓のあとをかつこうが矢のように外へ飛びだしました。そしてもうどこまでもどこまでもまっすぐに飛んで行つてとうとう見えなくなっていました。ゴーシュはしばらく呆れたように外を見ていましたが、そのまま倒れるように室のすみへころがって睡っていました。

次の晩もゴーシュは夜中すぎまでセ口を弾いてつかれて水を一杯のんでいますと、また扉をこつこつ叩くものがあります。今夜は何が来てもゆうべのかつこうのようにはじめからおどかして追い払ってやろうと思つてコップをもったまま待ち構えて居りますと、扉がすこしあいて一疋の狸の子がはいってきました。ゴーシュはそこでその扉をもう少し広くひらいて置いてどんと足をふんで、

「こら、狸、おまえは狸汁たぬこばいりということを知っているか。」とどなりました。すると狸の子はぼんやりした顔をしてきちんと床へ座すわったままだうもわからないというように首をまげて考えていましたが、しばらくたつて

「狸汁たぬこばいりってばく知らない。」と云いました。ゴーシュはその顔を見て思わず吹き出そうとしましたが、まだ無理に恐い顔をして、

「では教えてやろう。狸汁たぬこばいりというのはな。おまえのような狸をな、キャベジや塩とまぜてくたくたと煮ておれさまの食うよ

うにしたものだ。」と云いました。すると狸の子はまたふしぎそうに

「だってぼくのお父さんがね、ゴーシュさんはとてもいい人でこわくないから行って習えと云ったよ。」と云いました。そこで「ゴーシュもとうとう笑い出してしまいました。」

「何を習えと云ったんだ。おれはいそがしいんじゃないか。それに睡いんだよ。」

狸の子は俄に勢がついたように一足前へ出ました。

「ぼくは小太鼓の係りでねえ。セロへ合わせてもらって来いと云われたんだ。」

「どこにも小太鼓がないじゃないか。」

「そら、これ」狸の子はせなかから棒きれを二本出しました。

「それでどうするんだ。」

「ではね、『愉快な馬車屋』を弾いてください。」

「なんだ愉快な馬車屋ってジャズか。」

「ああこの譜だよ。」狸の子はせなかからまた一枚の譜をとり出しました。ゴーシュは手にとってわらい出しました。

「ふう、変な曲だなあ。よし、さあ弾くぞ。おまえは小太鼓を叩くのか。」ゴーシュは狸の子がどうするのかと思つてちらちらそつちを見ながら弾きはじめました。

すると狸の子は棒をもってセロの駒の下のところを拍子をとってばんぼん叩きはじめました。それがなかなかうまいので弾いているうちに「ゴーシュはこれは面白いぞと思いました。」

おしまいまでひいてしまうと狸の子はしばらく首をまげて考えました。

それからやっと考えついたというように云いました。

「「ゴーシュさんはこの二番目の糸をひくときはきたいに遅れるねえ。なんだかぼくがつまりくようになるよ。」

「ゴーシュははっとしました。たしかにその糸はどんなに手早く弾いてもすこしたってからでないと音が出ないような気がゆうべからしていたのです。」

「いや、そうかもしれない。このセ口は悪いんだよ。」とゴーシュはかなしそうに云いました。すると狸は気の毒そうにしてまたしばらく考えていましたが

「どこが悪いんだろうなあ。ではもう一ぺん弾いてくれますか。」

「いいとも弾くよ。」ゴーシュははじめました。狸の子はさっきのようにとんと叩きながら時々頭をまげてセ口に耳をつけるようにしました。そしておしまいまで来たときは今夜もまた東がぼうと明るくなっていました。

「ああ夜が明けたぞ。どうもありがとう。」狸の子は大へんあわてて譜や棒きれをせなかへしよってゴムテープでぱちんとめておじぎを二つ三つすると急いで外へ出て行っていました。

ゴーシュはぼんやりしてしばらくゆうべのこわれたガラスからはいつてくる風を吸っていましたが、町へ出て行くまで睡って元気をとり戻そうと急いでねごこへもぐり込みました。

次の晩もゴーシュは夜通しセ口を弾いて明方近く思わずつかれて楽譜をもったままうとうとしていますとまた誰か扉をこつこつと叩くものがあります。それもまるで聞えるか聞えないかの位でしたが毎晩のことなのでゴーシュはすぐ聞きつけて「おはいり。」と云いました。すると戸のすきまからはいつて来たのは一ぴきの野ねずみでした。そして大へんちいさなことをつれてちよろちよろとゴーシュの前へ歩いてきました。そのまた野ねずみのこどもときたらまるでけしこむのくらしいかないのでゴーシュはおもわずわらいました。すると野ねずみは何をわられたらうというようにきよろきよろしながらゴーシュの前に来て、青い栗の実を一つぶ前においてちゃんとおじぎをして云いました。

「先生、この児があんばいがわるくて死にそうでございますが先生お慈悲になおしてやってくださいまし。」

「おれが医者などやれるもんか。」ゴーシュはすこしむっとして云いました。すると野ねずみのお母さんは下を向いてしばらくだまっていました。がまた思い切ったように云いました。

「先生、それはうそでございます、先生は毎日あんなに上手にみんなの病気をなおしておいでになるではありませんか。」

「何のことかわからんね。」

「だって先生先生のおかげで、鬼さんのおばあさんもなおりましたし狸さんのお父さんもなおりましたしあんな意地悪の

みみずくまでなおしていただいたのにこの子ばかりお助けをいただけなのはあんまり情ないことでございます。」

「おいおい、それは何かの間ちがいだよ。おれはみみずくの病氣などなおしてやったことはないからな。もつとも狸の子はゆうべ来て楽隊のまねをして行ったがね。ははん。」ゴーシユは呆れてその子ねずみを見おろしてわらいました。

すると野鼠のお母さんは泣きだしてしまいました。

「ああこの児はどうせ病氣になるならもつと早くなればよかった。さっきまであれ位と鳴らしておいでになったのに、病氣になるといっしょにぴたっと音がとまってもうあとはいくらおねがいしても鳴らしてくださらないなんて。何てふしあわせな子どもだろう。」

ゴーシユはびっくりして叫びました。

「何だと、ぼくがセロを弾けばみみずくや兎の病氣がなおると。どういうわけだ。それは。」

野ねずみは眼を片手でこすりこすり云いました。

「はい、こころのものは病氣になるとみんな先生のおうちの床下にはいつて療すのでございます。」

「すると療るのか。」

「はい。からだ中とても血のまわりがよくなって大へんいい気持ちですぐ療る方もあればうちへ帰ってから療る方もあります。」

「ああそうか。おれのセロの音がごうごうひびくと、それがあんまの代りになっておまえたちの病氣がなおるといのか。よし。わかったよ。やってやろう。」ゴーシユはちょっとギウギウと糸を合せてそれからいきなりのねずみのこどもをつまんでセロの孔から中へ入れてしまいました。

「わたしもいっしょについて行きます。どこの病院でもそうですから。」おっかさんの野ねずみはきちがいのようになってセロに飛びつきました。

「おまえさんはいるかね。」セロ弾きはおっかさんの野ねずみをセロの孔からくぐしてやろうとしましたが顔が半分しかはいりませんでした。

野ねずみはばたしなから中のこどもに叫びました。

「おまえそこはいいかい。落ちるときいつも教えるように足をそろえてうまく落ちたかい。」

「いい。うまく落ちた。」こどものねずみはまるで蚊のような小さな声でセロの底で返事しました。

「大丈夫さ。だから泣き声出すなというんだ。」ゴーシュはおつかさんのねずみを下におろしてそれから弓をとって何とかラプソディとかいうものをこーごうがあがあ弾きました。するとおつかさんのねずみはいかにも心配そうにその音の工合くあいをきいていましたがとうとうこらえ切れなくなったふうで

「もう沢山たくさんです。どうか出してやってください。」と云いました。

「なあんだ、これでいいのか。」ゴージュはセ口をまげて孔のところに手をあてて待っていましたら間もなくこのものねずみが出てきました。ゴージュは、だまってそれをおろしてやりました。見るとすっかり目をつぶってぶるぶるぶるぶるえていました。

○

「どうだったの。いいかい。気分は。」

こどものねずみはすこしもへんじもしないでまだしばらく眼をつぶったままぐるぐるぐるぐる回っていました。がにわかに起きあがつて走りだした。

「ああよくなったんだ。ありがとうございます。ありがとうございます。」おっかさんのねずみもいっしょに走っていました。たが、まもなくゴーシュの前に来てしきりにおじぎをしながら

「ありがとうございます」と十ばかり云いました。

ゴ―シュは何かあいそうになって

「おい、おまえたちはパンはたべるのか。」とききました。

すると野鼠はびっくりしたようにきよろきよろあたりを見まわしてから

「いえ、もうおパンというものは小麦の粉をこねたりむしりしてこしらえたものでふくふく膨らんでいておいしいものな
そうでございますが、そうでなくても私どもはおうちの戸棚とだなへなど参ったこともございませんし、ましてこれ位お世話にな

りながらどうしてそれを運びに难道参れましょう。」と云いました。

「いや、そのことではないんだ。ただたべるのかときいたんだ。ではたべるんだな。ちょっと待てよ。その腹の悪いこともへやるからな。」

ゴーシュはセ口を床へ置いて戸棚からパンを一つまみむしって野ねずみの前へ置きました。

野ねずみはもうまるでばかのようになつて泣いたり笑ったりおじぎをしたりしてから大じそうにそれをくわえてこどもをさきに立てて外へ出て行きました。

「あああ。鼠と話すものもなかなかつかれるぞ。」ゴーシュはねどこへどっかり倒れてすぐぐうぐうねむってしまいました。それから六日目の晩でした。金星音楽団の人たちは町の公会堂のホールのうらの裏にある控室へみんなぱつと顔をほてらしてめいめい楽器をもって、そろそろホールの舞台から引きあげて来ました。首尾よく第六交響曲を仕上げたのです。ホールでは拍手の音がまだ嵐のように鳴って居ります。楽長はポケットへ手をつつ込んで拍手なんかどうでもいいというようにのそのそみんなの間を歩きまわっていましたが、じつはどうして嬉しさでいっぱいなのでした。みんなはたばこをくわえてマツチをすったり楽器をケースへ入れたりしました。

ホールはまだぱちぱち手が鳴っています。それどころではなくいよいよそれが高くなつて何だかこわいような手がつけれないような音になりました。大きな白いリボンを胸につけた司会者がはいって来ました。

「アンコールをやっています、何かみじかいものでもきかせてやってくださいませんか。」

すると楽長がきつとなつて答えました。「いけませんな。こういう大物のあとへ何を出したってこっちの気の済むようには行くもんでないんです。」

「では楽長さん出て一寸挨拶してください。」

「だめだ。おい、ゴーシュ君、何か出て弾いてやってくれ。」

「わたしがですか。」ゴーシュは呆氣にとられました。

「君だ、君だ。」ヴァイオリンの一番の人がいきなり顔をあげて云いました。

「さあ出て行きたまえ。」楽長が云いました。みんなもセロをむりにゴーシュに持たせて扉をあけるといきなり舞台へゴーシュを押し出してしまいました。ゴーシュがその孔のあいたセロをもってじつに困ってしまったって舞台へ出るとみんなはそれを見るというように「そうひどく手を叩きました。わあと叫んだものもあるようでした。」

「どこまでひとをばかにするんだ。よし見ている。印度の虎狩をひいてやるから。」ゴーシュはすっかり落ちついて舞台のまん中へ出ました。

それからあの猫の来たときのようにまるで怒った象のような勢で虎狩りを弾きました。ところが聴衆はしいんとなつて一生けん命聞いています。ゴーシュはどんどん弾きました。猫が切ながつてばちばち火花を出したところも過ぎました。扉へからだを何べんもぶつつけた所も過ぎました。

曲が終るとゴーシュはもうみんなの方などは見もせずちやうどその猫のようにすばやくセロをもって楽屋へ逃げ込みました。すると楽屋では楽長はじめ仲間がみんな火事にでもあったあとのように眼をじつとしてひっそりとすわり込んでいます。ゴーシュはやぶれかぶれだと思つてみんなの間をさっさとあるいて行つて向うの長椅子へどっかりとからだをおろして足を組んですわりました。

するとみんなが一ぺんに顔をこつちへ向けてゴーシュを見ましたがやはりまじめでべつにわらっているようでもありませんでした。

「こんやは変な晩だなあ。」

ゴーシュは思いました。ところが楽長は立つて云いました。

「ゴーシュ君、よかったぞお。あんな曲だけれどもここではみんなかなり本氣になつて聞いてたぞ。一週間か十日の間にずいぶん仕上げたなあ。十日前とくらべたらまるで赤ん坊と兵隊だ。やろうと思えばいつでもやれたんじゃないか、君。」仲間もみんな立つて来て「よかったぜ」とゴーシュに云いました。

「いや、からだが丈夫だからこんなこともできるよ。普通の人なら死んでしまうからな。」楽長が向うで云っていました。その晩遅くゴーシュは自分のうちへ歸つて来ました。

そしてまた水ががぶがぶ呑^のみました。それから窓をあけていつかつここの飛んで行ったと思った遠くのそらをながめながら

「ああかつこ。あのときはすまなかったなあ。おれは怒ったんじゃないんだ。」と云いました。